

# 鍋島家伝来 菊桐紋蒔絵風呂道具についての覚書き

寺澤 夏菜

はじめに

鍋島家に伝来した菊桐紋蒔絵風呂道具は佐賀県重要文化財として六件一三件と附二点が指定されている<sup>①</sup>。本稿では指定されている風呂道具と後に発見された△棒▽一点をあわせた七件一四点についての法量などを表1にまとめた。本稿では本資料の菊紋・桐紋についての覚書きを記し、今後の研究につなげたい。

本資料は小城鍋島家に伝来した。先行研究<sup>②</sup>により、これらは慶長二（一五九七）年に、豊臣秀吉が大坂城下玉造の鍋島直茂屋敷に御成した際に仕立てられたと考えられている。風呂道具は本来消耗品であり、蒔絵を施した風呂桶などの風呂道具類が現存していること自体が稀である。本作はひとえに天下人秀吉を称揚する目的で制作されたものと考えられる。元和三（一六一七）年に直茂が隠居するにあたり、孫の小城鍋島初代元茂の独立に際して譲られたと考えられている。

本資料は黒漆塗りの地に金の平蒔絵や絵梨子地を施し、針描の手法を用いて、菊紋と五七桐紋を大きく表している。いわゆる高台寺蒔絵である。菊桐紋は外側面だけでなく、道具によっては内側面や内底部の全体にまで施されており、輪郭は全て共通し、菊紋と桐紋は重なっておらず、相互が不規則に配置されている。また、紋の細部は少しずつ異なっており、菊紋は同じ紋が複数使用されることがあるが、大きく四種類に分類することができ、桐紋は病葉を描いていること、金紛の蒔き方や量が異なるため、同

じ紋は一つもない。

## 1 菊紋・桐紋の配置

風呂道具の外側面には全て菊紋・桐紋が施されており、種類によっては内側面・内底部にも菊紋や桐紋が配置されている。特に風呂道具という性質上、水を入れるので耐久性に乏しく、施すこと自体が珍しい。しかし、盥の内側面に菊紋・桐紋が交互に配置されており、盥・湯桶においては内底部に、柄杓は外底部に菊紋が施されている。また風呂桶の内底部においては、唯一桐紋が施されている。秀吉が所用したと考えられる他のものを見ても、菊紋・桐紋が両方使用されているものも多く見られるが、桐文蒔絵軍配団扇や桐文蒔絵旅茶筆筒など特に秀吉が直接触った・使用したものであろうものには桐紋が施されていると考えられる。

手桶や柄杓は通常付き人が持っているもので、秀吉が直接使用するものではないので、内底部には蒔絵を施さず、秀吉の目に留まる可能性の高い取っ手部分や柄杓の外底部に蒔絵を施したと考えられる。手桶の手持ち部分に菊紋・桐紋を配しており、取っ手部分が縦側板に貫通している出っ張りの部分にも丁寧に菊紋の蒔絵が施されている。また湯桶は湯を入れておくものであり、高貴な者が使用する湯であることを示すために内底部に菊紋を配した可能性がある。その点では、手桶も同様であるが蒔絵が施された蓋があることから、内部には施されなかったであろう。盥は高さが低

く、底面も大きいため、内側をよく見ることができ、内側面・内底部に菊紋・桐紋が配されており、豪華な造りとなっている。これらのことから、風呂桶は秀吉が直接使用するので、桐紋が内底部に配されていると考えられ、また秀吉の目に留まる可能性が高い位置・部分には菊紋・桐紋を配していると考えられる。

## 2 菊紋の文様

菊紋が多く配置されているのは手桶である。外側面の菊紋は花心が単純な円形（一個例外あり）であるが、平時絵や絵梨子地などの蒔絵技法に富んでいることから、同一の文様であることが少ない。しかし、外側面以外のところでは、花卉の表現方法や花心も単純な円形で表しているものもあれば、花模様や円形が小さいなど表現が多様であり、大きく四種類に分類することができる。本稿ではこの四種類の文様が施されている図版（手桶4-1）の菊紋を表2にした。また取っ手部分の菊紋の大きさは全てミリ単位ではあるが異なっていたことから、分業体制がある程度整い、個々の文様の表現については職人に委ねられていた可能性も考えられる。

菊紋蒔絵風呂道具はそもそも類例が少なく、佐賀県立博物館でも展覧会以外に具体的に論じていなかった。本稿では菊紋・桐紋について、形状や蒔絵技法を複雑に組み合わせることにより、変化に富んだ文様構成となっていることに触れ、その配置については秀吉の使用や視線が意識されたと推理した。

一般的に高台寺蒔絵は、大量・大柄・大胆・単純な図様や意匠を金粉で広い面積に施し、短時間で完成できる蒔絵といわれている。しかし、本資

料では、菊紋九四個のうち、中心が円形のもの六六個あり、二八個は他の三種類に分類（四個例外あり）でき、また、桐紋八九個は文様が全て異なっている。とても手の込んだ高台寺蒔絵であることから、本資料は秀吉のために誂えた特別なものであることがうかがえる。

### 【註】

(1) 平成一九年三月一四日、重第二百九号、菊紋蒔絵風呂道具 一具

(2) 小池富雄著「諸家所蔵の菊紋蒔絵風呂桶類について―豊臣秀吉所用とする伝承の検討と初期高台寺蒔絵の編年論として―」（『金鯰叢書』第三三輯、財団法人徳川黎明会、二〇〇六年）

（てらざわ・かな／佐賀県立博物館）

【表1】 菊桐紋蒔絵風呂道具類 法量一覧 単位cm

番号	名称	高	口径	横	内寸	口径	縦	内寸	内底部	横	内底部	縦	長	長柄	その他	外側面	内側面	内底部	外底部
1	風呂桶	64.8	87.0	83.5	73.0	70.0	70.0	62.0								菊紋・桐紋	—	桐紋	—
2	盥	28	74.2	71.0	74.2	71.0	65.7	65.7								菊紋・桐紋	菊紋・桐紋	菊紋	—
3-1	湯桶	35.7	51.1	48.5	51.1	48.5	43.3	43.0							内底部の菊紋 横 欠損、 縦29.8	菊紋・桐紋	—	菊紋	—
3-2	湯桶	35.8	50.8	48.1	49.7	48.5	43.0	43.8							内底部の菊紋 横29.3、 縦 欠損	菊紋・桐紋	—	菊紋	—
3-3	湯桶	36.2	51.3	48.7	49.7	48.6	43.3	43.5							内底部の菊紋 横29.7、 縦29.7	菊紋・桐紋	—	菊紋	—
3-4	湯桶	35.8	51.3	48.8	50.3	48.2	43.0	43.0							内底部の菊紋 横29.0 縦29.0	菊紋・桐紋	—	菊紋	—
4-1	手桶	48.6	42.7※1	39.9	38.3	35.8	33.0	32.6							口径 縦 蓋あり 40.8	菊紋・桐紋	—	—	—
4-2	手桶	48.2	42.5※1	39.8	38.8	36.4	33.0	33.0							口径 縦 蓋あり 40.5	菊紋・桐紋	—	—	—
4-3	手桶	48.2	42.1※1	39.2	38.7	36.3	33.4	32.7							口径 縦 蓋あり 41.0	菊紋・桐紋	—	—	—
4-4	手桶	48.1	42.3※1	40.1	39.0	36.4	33.5	33.0							口径 縦 蓋あり 40.9	菊紋・桐紋	—	—	—
5-1	柄杓	8.8	14.7	13.8	14.5	13.6	14.7※2	14.7※2	45.6	30.5					長柄の横2.0、縦1.5	菊紋・桐紋	—	—	菊紋
5-2	柄杓	8.8	15.0	14.1	14.5	13.4	14.7※2	14.7※2	45.5	30.5					長柄の横2.0、縦1.5	菊紋・桐紋	—	—	菊紋
6	水漉留輪	3.0	35.8	34.9	35.9	35.0										菊紋・桐紋	—	—	—
7	棒		2.5		1.5								73.8		上・下に1ヶ所ずつ小さな穴あり	菊紋・桐紋	—	—	—
8	(附)角盥	29.0													径37.5	菊紋・桐紋	—	菊紋・桐紋	—
9	(附)椀	18.0													胴径31.0	菊紋・桐紋	—	—	—

※1は取っ手を含めた長さ。

※2は外底部の長さ。内底部は桁があるため。

【表2】 《手桶4—1》の菊桐紋

